

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊ボローニャ留学体験記＊

小坂 大郎

ゴールデンウィークを利用してボローニャでの短期留学(5月4日～8日の1週間のみ!)および北イタリアの小旅行をしてきました。観光をしたのは、モザイクで有名なラヴェンナ、とても美味しいスパマンテ、フランチャ・コルタの産地イゼーオ湖、そしてミラノ万博です。

ボローニャで通った語学学校は、クルトウーラ・イタリアーナ。この学校に通うのはこれで3度目になります。ミラノで友人と会う約束がありましたし、過去の経験から、先生たちがとても熱心で、課外授業も充実していることが分かっていたので、今回もまた、ミラノからもとてもアクセスの良いボローニャのこの学校を選びました。

私がそもそも短期の語学留学に興味を持ったのは、日本イタリア会館主催のセミナー《イタリアファッションに学ぶ! 魅せ方のポイント》(平成20年度)に参加した時でした。講師のMIHO先生が元受講生であり、日本イタリア会館を通じてフィレンツェのLINGUA VIVA校に短期の留学をされたことを知り、その体験談を聞いたからです。

それまでは、留学といえば短くても半年とか、とにかく長期に渡るものだと思っていましたので、仕事を持ちながら留学するのは無理だと思い込んでいました。この機会に語学留学に強い興味を抱いた私は、早速日本イタリア会館のスタッフと相談し、1週間からでも受け入れてくれるクルトウーラ・イタリアーナに初めて短期留学をしたのです。平成21年秋のことでした。

宿泊先は学校が斡旋してくれるので、シングルルームの学生共同アパートで1週間あたり120ユーロ程度と、比較的安価にボローニャ滞在を楽

しむことができました。文法レベルの低いクラスの授業は午前であることが多いため、午後の課外授業に参加しないのならば、モデナやフェッラーラ等、近くの街にも観光に行けます。



【クラスメートたち】

●ボローニャについて

ボローニャという都市はミラノとフィレンツェのちょうど中間、交通の要に位置しており、非常にアクセス良好です。しかし、一般的な観光ルートからは少し外れるため、比較的落ち着いて生活することができます。ここには世界最古の大学として有名なボローニャ大学があり、数万人の学生が生活していると言われます。

街の雰囲気を決定づけているのは、総延長40キロにおよぶポルティコ(柱廊)でしょう。これがあるおかげで雨が降っても傘が必要ないほどで、中世さながらの雰囲気を湛えた非常に魅力的な街だと思えます。

食については、近隣にチーズや生ハムで有名なパルマや、バルサミコ酢で知られるモデナとい

った町々があり、優れた食材にめぐまれているため、郷土料理であるタリアテッレ・アル・ラゲー（ポロネーゼ風ミートソースの Pasta）やラザーニエ・アル・フォルノ（ラザニア）など、私たち日本人にもとても馴染みやすい美味しい料理に溢れています。また、イタリアの他の都市でもそうであるように、沢山の美味しいジェラート屋があり、特に「ラソルベッテリーア」という店のジェラートは絶品です。

今回の旅行では、同じエミリア・ロマーニャ州にあるラヴェンナにも行ったのですが、エミリア地方であるボローニャとロマーニャ地方とでは郷土料理が明確に異なっていることが体験でき、非常に興味深かったです。

●学校生活について

クルトゥーラ・イタリアーナでは、毎週月曜日に、その週の入学者を対象としたボローニャ市街の案内とアペリティーヴォの会があり、ガイドブックには掲載されていない街の情報を得たり、他の生徒さん達と容易に交流を深めることができるよう工夫されています。去年10月にもこの学校に通いましたので、先生たちもスタッフも私のことを覚えていてくれました。

初日の5月4日は授業が午後2時20分に終わり、ボローニャの市街めぐりに参加する人は、5時に学校前に集合とのことでした。これに参加して今回あらたに知ることができたのは、かつてボローニャ市街に運河が巡っていたこと（その名残として、学校近傍のパラッツォの壁にボートを係留する金具が残っている）、ポルティコが発達したのは、それが公共スペースと見做されて、その部分は課税されなかったからであること、また、ボローニャのシンボルの一つである聖ペトロニオ大聖堂が未完成に終わったのは、バチカンの聖ピエトロ大聖堂より巨大となる計画であったためバチカンが建設を中止させたからだという説（財政難に陥ったためという説も）があるといったことでした。

その後、カスティリオーネ通りを下ったところにあるマルゲリータ公園まで行き、公園内にあるオープン席のバルにてアペリティーヴォを味わいましたが、私達がバルに到着した時にはすでに以前から在学している生徒さん達が冷たい飲

み物を楽しんでおり、楽しく交流を深めることができました。

私は8時頃に挨拶をして帰途につきました。今回の滞在先のアパートはデル・プラテッロ通りであり、この通りはトラットリア、ビアホール、軽食屋が遅くまで開いており、深夜遅くまで学生や若い社会人がたむろしている非常に楽しい通りです。学校のスタッフに、この通りのオススメのお店を聞いたところ、この通りのお店なら全てお墨付きだ、と言っていたのが印象的でした。

部屋に荷物を置いてから、近所のトラットリアで夕食をと思って出掛けたところ、途中、オープン席のあるバルの前を通りかかった時に、一人の酔っ払いがマイクを差し出し、インタビューを求めてきました。危険ではなさそうだったものの、さっさとスルーしようとするすと、私が片言のイタリア語を話すことが分かって逆に食いついてきてしまい、そのうちに彼の友達も寄ってきて、とうとう私も彼らと一緒に飲むことに・・・。



【5人の酔いどれたち】

私に声をかけてきたのは、ピッツェリアで働いているイタリア人のクリスティアンで、この人は全くの酔っ払いでした。アレクセイは、やたらとロシアやプーチンについて私がどう思っているか尋ねてきました。西洋人ではない者の意見を聞きたいとのことでした。また、日本では普通、月給をいくらもらっているかとか、アジアの生死観がどんなものなのか知りたがりました。彼の月給は1300ユーロとのことで、私はあなたなら日本ではもっと高い給料をもらえると答えました。

ただ、確かに日本の方が平均収入の点ではイ

タリアより上かもしれませんが、休暇日数や勤務時間、それに生活コストが全く違いますので、簡単に比較はできません。彼は実はロシア人で、イタリア人のキアラと婚約していました。ヴィヴィアンはカナダ人とタイ人のハーフで、20年前からイタリアに住んでおり、イタリア人男性と結婚し、子供がいるとのことでした。彼女はとても優しく、非常にわかりやすいイタリア語で話してくれました。

結局11時頃に再会を約して解散しましたが、アルコールしか胃に入っておらず、とにかく何か食べたかったので、まだ開いていたすぐ近くのトラットリアでラザニアとワインを食べました。幸い宿泊先のすぐ近所だったので助かりましたが、帰宅後シャワーを浴びて部屋に戻るともう1時になっていました。

翌、火曜日には、課外授業で先生随行のもととセント・ステファノ教会群を訪問し、詳しい説明を聞くことができました。各教会には深い来歴や伝説があり、興味深い話が聞けて、とても満足しました。解散後はセント・ステファノ広場のパールのオープン席に陣取って、みんなで冷たい飲み物をいただきました。

水曜日は課外授業が無かったため、クラスメートと晩にどこかへ行こうという話になり、決まったら連絡をくれるよう頼んでおいて、一人で買い物に行きました。やがて仲間から連絡があり、ビアホールに集合。クラスメートの友達や兄弟も来ており、色々な話ができてとても楽しかったです。



【ピツェリアにて】

木曜日の課外授業はイタリア語の歴史についてで、それが終わると皆でピツェリアに繰り出し

て食事をしました。その後は学校のスタッフも一緒にパールに行き、深夜まで飲んでいました。

そして金曜日は・・・、そう、私にとって最後の授業の日です。あつという間の一週間でした。学校で学んだ文法は半過去で、すでにイタリア会館で学んでいたものではありませんでしたが、近過去との使い分けは奥が深く、またこれより上級のクラスに行くと言葉も会話内容もずっと難しくなるので、私にとっては適切なレベルであったと思います。

今回の短期留学では、クラスメート達と楽しい交流ができて良かった反面、毎晩遅くまで飲んでいただけで、宿題は翌朝早起きをしてやる羽目になり、ずっと寝不足状態でした。仕事の都合上、何週間もの留学はできないのですが、こうして旅行がわりに1週間だけでも留学しますと、その間はイタリア語漬けになりますので、効果的な学習手段であることは間違いありません。日々の学習と併せて、これからも機会があるごとに是非こうした留学を続けていきたいと思っています。

(当館語学講座受講生)

イタリア語 無料体験レッスン

2015年10月より開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

9/29(火) 11:00～12:30 10/3(土) 11:00～12:30

● 四条丸丸：ウイングス京都

9/29(火) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

10/5(月) 11:00～12:30 10/5(月) 19:00～20:30

イタリア語 無料体験カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

10/10(土) 14:00より順次

スペイン語 無料体験レッスン

● 京都本校：日本イタリア会館

10/10(土) 11:00～12:30

*カルヴィーノとアーティチョーク 21

龍とカルヴィーノ (2) *

堤 康徳

前回、東洋と西洋における龍の表象の相違から書きおこし、最後に、イタリアの昔話に登場する龍について触れた。カルヴィーノが指摘したように、シチリアの昔話には、超自然的な存在として、しばしば母龍 *mamma-draga* が現れる。たとえば、シチリアの昔話「愛の王」の母龍は、息子の結婚を妨害する邪悪な魔女のごとき母親だった。それにたいし、松谷みよ子の『龍の子太郎』の母龍には、息子を巨大な愛で包む強く優しい母親のイメージがある。

興味深いのは、この東西どちらの物語においても、一方が邪悪な母親、他方が慈母という違いはあるにせよ、龍と母親のイメージが重ね合わされていることだ。ここで思い出されるのは、ユング心理学の元型のひとつ「太母」である。ユングは、夢や神話や昔話において人類共通のイメージを生み出す源を元型と呼んだ。ユングによれば太母は、ペルソナ、影、アニマ、アニムス、自己、老賢者などとともに、普遍的無意識にひそむ元型のひとつなのである。ユングは英雄神話において、英雄によって退治される龍を、太母の象徴と考えた。

太母を理解するうえで参考になるのが、ユングの高弟、エーリッヒ・ノイマンが著した『意識の起源史』である。日本におけるユング分析心理学の第一人者である河合隼雄氏が、この本についてわかりやすく内容を紹介した文章があるので、それを引用させていただきたい。河合氏によれば、「この著作の特色は、人間の意識、従ってその中心としての自我の発達段階を、神話の中に示される元型的な表象によって明らかにしようとしたことにある。

多くの天地創造の神話の始めに、カオスの状態が記述されるように、意識と無意識は最初は分離されず混沌とした状態にある。この状態を、ノイマンは古代の象徴であるウロボロスによって表し

ている。(中略)このようなカオスの中から、自我存在がその萌芽を現すとき、世界は太母の姿をとって顕現する。

太母の像は世界中の神話に重要な地位を占めている。本書の中のアプロディーテーはそのひとつである。やっと目覚めた自我にとって、世界は、自我を養い育ててくれるやさしい母として映るか、あるいは、出現し始めた自我を呑みこみ、もとのカオスへと逆行せしめる恐ろしい母として映るか、両面性をそなえている(河合隼雄「解題——女性の自己実現の問題」エーリッヒ・ノイマン著・河合隼雄監修『アモールとプシケー』所収、紀伊國屋書店、2006年、p. 204)。

この一節は、エーリッヒ・ノイマンの別の著書『アモールとプシケー』に付された河合氏の解題のなかにある。『アモールとプシケー』を理解するうえでも必要不可欠な『意識の起源史』について、河合氏はかなり紙数を割いて解説しているのである。

「アモール(=クピド)とプシケー」神話におけるアプロディーテー(=ウェヌス)と、この神話を土台とするシチリアの昔話「愛の王」の母龍がおそろしい太母であるとするれば、『龍の子太郎』の母龍はやさしい太母といえるだろう。

天地創造の神話に続き、人間の意識のさらなる発展段階を説明するのが英雄神話である。英雄による龍退治をフロイトが息子による父親殺しと解釈するのにたいし、ユングは龍を太母の象徴と考えた。

太母と英雄の戦いは、すなわち、自我が無意識の呑みこむ力に抗して、その自立性を確立するための戦いであると解釈した。ノイマンもこの線に沿って英雄神話を考え、このような象徴的な意味での「母親殺し」、「父親殺し」のテーマの重要性を強調する(同書、p. 205)

じつは、カルヴィーノもまた、一風変わったというか、ちょっと情けない龍の登場する童話を書いている。ここで、「竜と蝶」と題されたこの童話を読んでみよう(初出は、1978年2月4日付 *Corriere della sera illustrato* 紙)。この作品は、カルヴィーノ

が1977年に、子供向けテレビ番組(結局は製作されなかった)のために書いた6篇の物語のひとつである。そのうちの3篇を収める一冊の絵本が2012年に出版された(Italo Calvino, *Il drago e le farfalle*, Mondadori)。絵を描いたのは、アルゼンチンに生まれ、1989年からミラノを拠点に活動する挿絵画家のファビアン・ネグリンである。



【calvino 龍と蝶表紙】

物語のあらすじは、およそ以下のとおり。

3本マストの帆船「センプローニア号」が海賊に襲われる。海賊たちは、財宝の隠された龍の洞窟のありかを示す地図を奪ってから、見習い水夫、ヴァルデマーロを海に突き落とす。ヴァルデマーロが漂着した熱帯の「千一本のヤシの島」には、177年ごとに洞窟から出て島民を皆殺しにするという龍の伝説があった。龍が最後に現れてから、まさに177年が経とうとしていた。総督の娘、ビアンカペルラは龍の出現に恐怖と期待を同時に感じている。龍からわが身を救い出す騎士が現れるのを待っているのだ。一方、地図を盗んだ海賊たちは、ついに龍の洞窟を見つけ、入口をふさいでいた岩をどかす。すると龍が現れ、海賊たちは一目散に逃げ出した。

自由の身になった龍は、草原を飛び跳ねなが

ら、蝶をつかまえようとする。龍は、蝶も何よりも愛していた。「ああ、私も蝶になって花びらのうえに軽やかに舞い降りたいなあ！ イモムシが蝶に変身するのに、同じように醜い私は、なぜすばらしい蝶になれないのだろう？」。

龍は草原でビアンカペルラと出会い、つかまえる。「龍さん、お願いだから私を食べないで」と懇願する彼女に龍は言う。「あんたはきつと蝶の女王にちがいない。私も蝶になりたいんだ！ それにはどうすればいいか教えておくれ！」

このやりとりを隠れて聞いていたヴァルデマーロが、「いい方法がある」と言ってそのとき姿を現す。「私は騎士を待っていたのに。あなたは騎士ではなさそうね」とビアンカペルラ。「私が好きなのは蝶だ。おまえはまさか蝶ではあるまい」と龍。少年は「それがしは鱗翅類の変態の指導教官である」と応じ、学校で使うような大判の紙を広げて説明を始める。その紙には、イモムシが自らの口から糸を出して体をぐるぐる巻きにしてサナギになり、やがてサナギが開いて蝶になるまでの変容が描かれていた。「私にはサナギを作るための糸がない」と言う龍に、少年は「これで試してみよう」と太いロープを取り出して、龍の体に何メートルも巻きつけてがんじがらめにする。

このあと、多くの読者が望むであろうハッピーエンドの結末が用意されている。最後の一節を引用しよう。

「ほんとうに私は蝶になれるのかい？」

「もちろんだとも」

「どのくらい時間がかかる？」

「まずぼくをおまえの洞窟に、財宝の隠された場所に案内するんだ。そこで待っていれば、いずれ蝶になるさ」

ビアンカペルラの歓喜を想像していただきたい。ヴァルデマーロこそ、自分がずっと夢見てきた、勇敢な龍の勝者であるを知ったのだから。

総督がどんなに喜んだか想像していただきたい。龍がロープで縛られ、ぐるぐる巻きにされて、まるで郵便小包のように洞窟に送り返されてきたのだから。彼がどんなに安心したか想像していただきたい。掟にしたがって、娘を嫁

がせることになる龍の勝者が、一文なしのみじめな遭難者ではなく、財宝の所有者であることがわかったのだから。

サラミソーセージのように縛られ、蝶になるのを待っていた龍のはやる気持ちをご想像あれ。檻のなかで縄を解かれ、自分が以前と変わらぬ龍であるとわかったとき、どんなに落胆したかを。

ヴァルデマーロがいかに龍をなぐさめたかご想像あれ。彼は龍にこう言ったのだった。「おまえが毛虫になっていたなら、もっとみじめだったぞ」(Italo Calvino, *Il drago e le farfalle*, Mondadori, 2012, p. 29)



【calvino 龍と蝶】

この物語はカルヴィーノの創作であって、神話でも昔話でもない。だが、伝統的な龍の表象を部分的には継承しているはずである。ノイマンによれば、英雄神話における龍との戦いは、英雄・龍・宝物の三つの基本要素から成っている。「この宝物は具体的には、得難い貴重な性質・救い出すべき囚われの女性・真珠・生命の水・財宝・不死の薬草・として登場する」(エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』林道義訳、紀伊國屋書店、2006年、pp. 199-200)。このノイマンの定義は、カルヴィーノの童話「龍と蝶」にも当てはまるが、この童話には次のような特色がある。まず、ヒーロー、ヴァルデマーロが、龍退治の代償として獲得したのは、女性と宝物のふたつであること。龍退治は、龍が殺されずに元の住みかに戻されただけであること。だが、カルヴィーノの童話の龍が、おそら

く古今東西のどの龍ともことなるのは、イモムシが蝶に変容するように、この龍も蝶になることを夢想している点である。

カルヴィーノの小説全般においておおむね妥当と思われるのは、父と子の関係に重きがおかれ、母親の影がいたってうすい点である。「竜と蝶」においても、母親は不在である。ヴァルデマーロの母親も、ビアンカペルラの母も登場しないのだから。あるいは岩に封じこめられた龍こそが母親なのだろうか。蝶への変身願望のあるこの龍は、自分の醜さへのコンプレックスをかかえたまま、自己実現できずに永遠に生きることをよぎなくされている。つまり、太母になりそこねた、疎外された母龍なのかもしれない。

(上智大学講師)

～イタリア料理店紹介～

【oasi la vecchia casa】

大阪の食材を中心としたおまかせのコース料理です。南河内から発信する日本のスローフードを感じて頂ければ幸いです。

住所：大阪府富田林市富田林町3-13

<http://oasi-la-vecchia-casa.wix.com/oasi->

電話：0721-21-3078

特典(日本イタリア会館会員証お持ちの方)

お飲み物1杯サービス(ソフトドリンク、あるいはグラスワイン) ※平成27年9月末まで



編集・発行 // (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>